

## ◆ 第1回 酪農家が置かれている現状

### ～変革迫られる畜産界～

BSEなどの伝染病の発生は別問題として、今、日本の酪農(畜産)は根本的な変革を迫られており、その要因は大きく分けて5つ考えられます。

#### ①【牛の能力の向上】

日本の乳牛の年間泌乳量はこの10年間で1,000kg増加して9,000kgを越え、アメリカを抜いて世界第2位になりました。

牛を改良する機関ではさらなる乳量増加を目指しており、酪農家にはそれに見合った飼養管理技術が求められています。10年前と同じ飼い方をしているのはトラブル続出で、生産性向上は期待できません。]

#### ②【生産コストと乳代のバランス】

今は、農業を含めて世の中全てが国際化を求められる時代。輸入自由化により乳価を下げざるを得ない状況で、今後は生産コスト削減を徹底していかねば国際化に対応できません。

#### ③【産業として自立】

国は食糧自給率の向上を目指し各種政策を実施してはいますが、「食と農の再生プラン」発表を期に、生産者から消費者に政策の軸足は転換されつつあります。

同プランでは、農業にも競争原理を導入して効率的な部門を生き残らせる“リストラ”の促進が打ち出されています。

赤字財政の中、補助金もいつまでも期待できるものではありません。結局、補助金に頼らず収益をあげられる足腰の強い経営体質を作り、1人前の産業としての自立が求められています。

#### ④【環境問題】

環境型あるいは循環型酪農という言葉を目にした方も多いと思います。ヨーロッパではこの思想が強く、乳量も日本の3分の2程度に抑え、対草地面積で飼養頭数が制限されています。

一方、輸入飼料に依存した日本酪農は、糞尿を輸出しない限り物質循環を完結させることができず、環境に優しい酪農の実現はかなり困難なものがあります。

#### ⑤【地球温暖化と食料危機】

アメリカの穀物適作地域は温暖化によって北上していますが、農地の北上はできません。そのためアメリカの今後の穀物供給能力は低下する可能性が高いと言われています。

一方で地球上の9割の人間が飢え、かつ、途上国の生活水準向上により食糧需給はひっ迫しています。いつまでも輸入穀物に依存した酪農が続けられる保証はどこにもないのです。